

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

The quantitative studies in interlanguage of honorific verbs : A comparison of Chinese and Korean second language learners and Japanese native speakers

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮田, 剛章, MIYATA, Takeaki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002151">https://doi.org/10.15084/00002151</a>

# 敬語動詞における日本語学習者の中間言語の量的研究 —— 中国人および韓国人学習者と日本語母語話者との比較から ——

宮田 剛章

キーワード

第二言語習得, 敬語, 中間言語の定量化, 確率モデル

## 要 旨

本稿の目的は、中国人・韓国人日本語学習者を対象に敬語動詞における中間言語を数量化し、その結果を基に、第二言語としての敬語動詞の習得状況を量的中間言語という観点から解明することである。概して、日本語学習者は日本語運用能力が日本語母語話者に近づくにつれ、量的中間言語が発達することが確認されたが、それを構成する正用的および誤用的中間言語の発達は学習者の属性により異なる。また、母語の影響については、韓国人学習者の謙讓語の一部に確認されたのみであった。言語的転移以外に心理言語的・社会心理的転移も考えられたが、どの敬語種・対応群でも心理言語的・社会心理的転移の可能性が低いと思われる。

## 1. はじめに

敬語は日本語学習において学習者が抱える問題の1つである。平林・浜(1988)が指摘するように、敬語が難しいといわれるのは、文法形式によるのではなく、複雑な人間関係を考えた上で1つの適切な表現形式を選ばなければならないためだということも、敬語習得を困難にさせている要因である。また、熊井(1992)は、敬語運用の問題は態度やパーソナリティーの問題と結び付けられる可能性が高く、対人関係に深刻な摩擦を起こしかねないと指摘している。従って、日本語教師は文法面だけではなく敬語を含めた待遇表現についても、適切な指導をしていかなければならない。

敬語習得に関しては、これまでにいくつかの報告(宮岡・玉岡2002;宮岡・玉岡・林2003;宮田2004a, 2004b)がなされているが、量的研究はこれまでのところ非常に少なく、かつ調査協力者の学習者の属性が限定的であるため、敬語習得の全体像が把握しきれていない。しかもそれらは、日本語学習者の誤答を重視せず、正答のみを観察対象として敬語の習得状況としているに留まっている。中間言語の定量化については、宮田(2004b)が提言・言及を行っているが、ここでは中級中国人学習者のみが対象であり、また文法性判断テストの正答と誤答を基に数量化された中間言語(以下、量的中間言語とする)の大小についてまでしか述べられておらず、具体的な数量化までには到達していない。

本稿の目的は、中国人・韓国人日本語学習者を対象に量的中間言語のモデル化を行った後、文法性判断テストの結果を仮説モデルに適用し、敬語動詞における日本語学習者の中間言語を数量

化することである。そしてその結果を基に、第二言語としての敬語動詞の習得について考察し、日本語教育への提言を述べたい。

## 2. 調査・分析方法

調査協力者は20代から30代で、中国語を母語とする中国人学習者（男性20名、女性54名、計74名）<sup>1)</sup>、韓国語を母語とする韓国人学習者（男性17名、女性54名、計71名）、および1年を超える社会経験を持つ日本語母語話者（男性25名、女性32名、計57名）である。調査時期は2001年2月、2002年9月～2003年3月である<sup>2)</sup>。

まず調査協力者のプレースメントのため、手紙文<sup>3)</sup>の作成というタスクを与えた。プレースメントの基準<sup>4)</sup>として牧野(1995)を参照し、中国・韓国人学習者をそれぞれ上位・下位群に分け、それに日本語母語話者の群を加えた計5群を独立群として分析対象とした<sup>5)</sup>。また、学習者の敬語動詞の誤用訂正能力を測定するため、文法性判断テストを出題した。

次に本稿で用いた敬語機能の分類について説明する。表1に本稿で用いる敬語動詞の機能分類を示した。尊敬語と謙譲語については蒲谷・川口・坂本(1998)、菊地(1997)を参考に分類を行った。従来の分類と異なる点は、従来の謙譲語を「謙譲語」と「丁重語」に分け、いわゆる丁寧語を「丁寧体」と呼んでいるところである。謙譲語と丁重語は敬語機能が異なるにも関わらず、日本語教育の現場では謙譲語として導入されていることもあり、習得状況が尊敬語以上に予測しがたい。そこで、本稿では謙譲語と丁重語を区別する。また、いわゆる丁寧語については、待遇上の文体を決定する力を持つとする宮地(1982)の見解に従い、「丁寧体」という用語を用いる。

表1 敬語機能の再分類

従来の分類	本稿の分類	
尊敬語	尊敬語	話し手が行為者に配慮：(お/ご)～になる、～られる、なさる、おっしゃる、召し上がる、など
謙譲語	謙譲語	話し手が行為者に配慮を与えず、行為の関係者に配慮：(お/ご)～する、拝見する、申し上げる、など
	丁重語	話し手が行為者に配慮を与えない・場の改まり⇒話し手が聞き手に配慮：いたす、参る、申す、ござる、存じる、おる
丁寧語	丁寧体	話し手が聞き手に配慮：～です、～ます、～でございます、～であります

文法性判断テストは尊敬語問題（16問）、謙譲語問題（24問）、丁重語問題（16問）、採点対象外問題<sup>6)</sup>（14問）から構成されている。全ての問題の文体は丁寧体で単文形式である。誤用訂正能力を測定するにあたり、各設問では上・超絶レベルの語彙を避け、他の影響がないように考慮した。

それぞれの問題には交替形式・添加形式<sup>7)</sup>を考慮しながら敬語動詞を配し、その部分に下線を施し、その下に解答欄の括弧を設定した。そして、下線部の敬語動詞の用法が誤っていると思えば訂正し、正しいと思えば丸を書くよう指示した。

場面設定は、話し手である「私」が聞き手である「A先生」に話しかけている場面である。話題に登場する人物は、「私」の「父」と、他の先生である「B先生」である。「父」と「B先生」は、「私」と「A先生」が話している場面にはいない。話し手である「私」は「A先生」、「B先生」を高く待遇すべき場面である。文法性判断テストは、宮岡他(2002)を参考に作成した。表2に文法性判断テストの問題とその解答例を示す。

表2 文法性判断テスト問題の特徴と例文・解答例

敬語問題	問題の下位分類	問題の特徴と例文・解答例
尊敬語問題 (16問)	人間関係の誤用問題	話者や話者のウチの者を行為者にして尊敬語を使うべきではないのに、使っている。 例文) 父は明日東京へいらっしゃいます。 解答例) 参ります, 行きます, など。
	文法的誤用問題	形態・統語的に尊敬語が不適切になっている。 例文) B先生はA先生に授業についてなにか尋ねになりましたか。 解答例) お尋ねになりましたか, 聞きましたか, など。
謙讓語問題 (24問)	人間関係の誤用問題	ソトの者を行為者に, また話者や話者のウチの者を関係者にしたりして謙讓語を使うべきではないのに, 使っている。 例文) A先生は私の家にうかがいましたか。 解答例) いらっしゃいましたか, 来ましたか, など。
	関係者不在問題	謙讓語には必ず関係者が必要なのに, 関係者が存在しない。 例文) 私はタバコをお吸いします。 解答例) 吸います, など。
	文法的誤用問題	形態・統語的に謙讓語が不適切になっている。 例文) 父はB先生に経済の本を拝借にしました。 解答例) 拝借しました, 借りました, など。
丁重語問題 (16問)	人間関係の誤用問題	ソトの者を行為者にして丁重語を使うべきではないのに, 使っている。 例文) B先生は次はアジア経済を研究いたします。 解答例) ご研究になります, 研究します, など。
	文法的誤用問題	形態・統語的に丁重語が不適切になっている。 例文) 父はわたしに経済学について質問いたんです。 解答例) 質問いたします, 質問します, など。

まず、待遇上誤った敬語問題を「人間関係の誤用問題」とし、「社会言語的誤用訂正能力1」を測る設問と定義する。表2のテストでは、尊敬語「いらっしゃいます」が動作主である「父」に使われ、謙讓語「うかがいましたか」が動作主である「A先生」と関係者である「私」に使われている。また、丁重語「研究いたします」が動作主であるB先生に使われている。いずれも待遇上誤った用法である。

謙讓語については、謙讓語使用の際には動作に関わる人物（関係者）が必要であり、関係者の不在時は謙讓語が使用できないという規則があることを考慮し、「関係者不在問題」を謙讓語問題に追加し、「社会言語的誤用訂正能力2」を測る設問と定義する。表2のテストでは、動作主である「私」に謙讓語「お吸いします」が適用されているが、「私」が喫煙することで影響を受

ける関係者がいないことから、不適切な用法となる。

次に、形態・統語上誤った敬語問題を「文法的誤用問題」とし、敬語使用における「文法的誤用訂正能力」を測る設問と定義する。表2のテストでは、尊敬語については下線の動詞が接頭辞「お」が欠如した形、謙讓語については「拝借」と「しました」の間に余計に「に」が挿入された形、丁寧語については「質問いたんです」という動詞の活用が間違った形が出題されている。

本稿の「文法的誤用問題」「人間関係の誤用問題」は、それぞれ宮岡他(2002)の「文法事項」「自己・身内敬語」に一致するが、宮岡他(2002)の「他者敬語」に相当するものは本稿では加えなかった。宮岡他(2002)が「他者敬語」とする問題は、述部が「普通語+丁寧体」となっているものを誤りとし、それを「敬語+丁寧体」に修正させるというもののだが、大きなコンテキストで考えたときに必ずしもそれが誤りだとは限らないので、本稿では誤答扱いにはしなかった。

文法性判断テストにおいては、文法上かつ待遇上正しければ正答とし、そうでなければ誤答とした<sup>8</sup>。採点后、解答の種類を「訂正正答」「丸誤答」「訂正誤答」「空欄誤答」の4つに分類した。

「訂正正答」 下線部を誤りだとし、正判断できており、かつ訂正後も正しい解答。

「丸誤答」 下線部は誤りなのに丸をつけている解答。

「訂正誤答」 下線部を誤りだとし、正判断できているが、訂正後が誤りである解答。

「空欄誤答」 下線部を訂正せず空欄にしてある解答。

このように各敬語種において、日本語学習者および日本語母語話者（独立群）の誤用訂正を問題種と解答種に分けて定量化し、検定の対象とした。本稿では、(解答種) × (独立群) との分割表を作成し、 $\chi^2$ 検定により学習者および問題種に対する解答種の比率の差を検証する。

### 3. 量的中間言語のモデル

宮田(2004b)は、文法性判断テストの解答を中間言語を反映する解答とそうでない解答を区別するために、図1のような量的中間言語の確率モデルを設定した（太字部分が中間言語を反映する解答）。

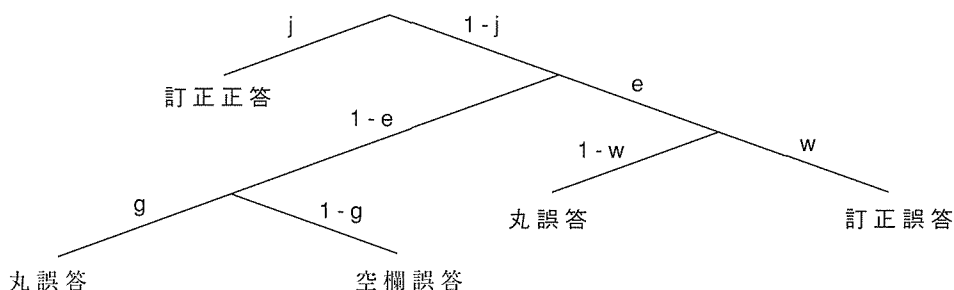


図1 量的中間言語の確率モデル

今回の調査の文法性判断テストは非文ベースであり、第二言語である日本語を用いて訂正すれば、正答でも誤答でも中間言語を反映した解答と考えることができる。逆に、空欄の解答は知識や規則がない結果とみなすことができる<sup>9</sup>。丸の解答は、訂正正答、訂正誤答、および空欄誤答と違って、中間言語を反映しているかどうかははっきりしないということになる。ここでは、宮田(2004b)で提案した仮説モデルを構成する係数の近似値を求めることで、中間言語を反映した丸誤答とそうでない丸誤答の分別を行った。

まず、モデルの頂点から  $j$  と  $1-j$  の割合でそれぞれ訂正正答と誤答に分かれる。誤答がさらに  $e$  と  $1-e$  の割合で中間言語を反映した解答と反映しない解答に分かれる。中間言語を反映した誤答は  $w$  の割合で訂正誤答に、その残り  $1-w$  が中間言語を反映した丸誤答になる。一方、中間言語を反映しない誤答は  $g$  の割合で中間言語を反映しない丸誤答に、残り  $1-g$  が空欄誤答になる。

表3 モデルから得られた係数

係数	特性
$j$	日本語の規範・文法に適い、学習者も持っている知識・規則の割合。
$e$	日本語の規範・文法に適っていないが、学習者は持っている知識・規則の割合。
$g$	中間言語とは無関係の係数。
$w$	日本語の規範・文法に適っていないが、学習者は持っている知識・規則のうち、訂正誤答の割合。

解答種の定量化は、図1の頂点から末端に至るまで割合を乗じていくことで導かれる。

表4 解答種の定量化

$A=j$	全解答に対する訂正正答（正用的中間言語）の割合。
$B=ew$	誤用全体に対する訂正誤答の割合。
$C=e(1-w)+(1-e)g$	誤用全体に対する丸誤答の割合。
$D=(1-e)(1-g)$	誤用全体に対する空欄誤答の割合。
$E=e(1-j)$	中間言語を反映した誤答（誤用的中間言語）の割合。
$F=A+E=j+e(1-j)$	中間言語の割合（量的中間言語の総体）。

$\chi^2$ 検定の結果より、解答種の比率の大小関係は独立群の間で算出可能となり、それを構成する係数の関係も導くことができる。その過程において、全解答に対する訂正正答の比率（確率モデルでは  $A=j$ ）、全誤答に対する訂正誤答の比率（確率モデルでは  $B=ew$ ）、全誤答に対する丸誤答の比率（確率モデルでは  $C=e(1-w)+(1-e)g$ ）、全誤答に対する空欄誤答の比率（確率モデルでは  $D=(1-e)(1-g)$ ）に対して、多重比較法<sup>10</sup>を適用していく。定量分析を扱っている先行研究では、検定のみによって習得プロセスを解明しようとしていたが、有意差の有無を確認するという性質上、有意差が確認されてもどれぐらいの差が見込まれるのかまでは触れられていな

い。中には有意差があっても、実際はわずかな差でしかないものもある。そこで本稿では、検定によって導かれた関係式と最小二乗法<sup>1)</sup>により係数を近似的に算出し、最終的に量的中間言語（日本語母語話者なら敬語習得量）を数量化する。具体的には、正用的中間言語 A（訂正正答）と誤用的中間言語 E（訂正誤答と中間言語を反映した丸誤答）の割合の和が量的中間言語となる。

#### 4. 結果

4.1節では、尊敬語、謙譲語、丁寧語について、敬語動詞における解答種の比率の検定を行う。そして、(解答種) × (独立群) との分割表を基に、 $\chi^2$ 検定により問題種、および日本語学習者・日本語母語話者に対する解答種の比率の差を検定し、多重比較を行う。その結果から、係数の関係式を導く。4.2節では4.1節の結果を基に、最小二乗法により確率モデルを構成する係数を算出する。

##### 4.1. 敬語動詞における解答種の比率の検定

###### 4.1.1. 尊敬語

表5に文法性判断テストの尊敬語問題におけるクロス表を示す。セルの数字は文法性判断テストを解答した際の頻度を示す。人間関係の誤用問題および文法的誤用問題において、5%水準で比率の差が確認された。

表5 尊敬語の誤用訂正におけるクロス表

対応群	解答種	中国下位	中国上位	韓国下位	韓国上位	日本	合計B	$\chi^2(12)$ , p 値
人間関係の 誤用問題	訂正正答	233	107	184	227	422	1173	222.7, 0.000*
	訂正誤答	99	29	48	27	11	214	
	丸誤答	90	13	50	16	23	192	
	空欄誤答	18	3	14	2	0	37	
	合計A	440	152	296	272	456	1616	
文法的 誤用問題	訂正正答	160	81	127	186	360	914	215.1, 0.000*
	訂正誤答	53	13	32	18	18	134	
	丸誤答	199	50	114	63	77	503	
	空欄誤答	28	8	23	5	1	65	
	合計A	440	152	296	272	456	1616	

次に多重比較を進める（表6、7参照）。以下独立群の番号は、1：中国下位、2：中国上位、3：韓国下位、4：韓国上位、5：日本語母語話者である。列の多重比較の場合、4群の組み合わせの多重比較は2.5%水準、3群の組み合わせは1.5%水準、2群の組み合わせは1%水準で検

定を行う。また行の多重比較は、一貫して1.5%水準で行われている。スラッシュ「/」は、前段階での検定で棄却されなかった組み合わせを構成する組み合わせで、それ以降は多重比較が進められていないことを示す。

表6 独立群の列の多重比較（尊敬語）

独立群の 組み合わせ	対 応 群			
	人間関係		文法	
	カイ二乗	p 値	カイ二乗	p 値
1 × 2 × 3 × 4	79.5	0.000*	77.2	0.000*
1 × 2 × 3 × 5	191.8	0.000*	192.0	0.000*
1 × 2 × 4 × 5	211.3	0.000*	188.7	0.000*
1 × 3 × 4 × 5	217.9	0.000*	215.2	0.000*
2 × 3 × 4 × 5	133.2	0.000*	125.3	0.000*
1 × 2 × 3	21.4	0.002*	15.2	0.019
1 × 2 × 4	76.4	0.000*	71.3	0.000*
1 × 2 × 5	185.8	0.000*	173.2	0.000*
1 × 3 × 4	71.8	0.000*	75.2	0.000*
1 × 3 × 5	186.4	0.000*	192.2	0.000*
1 × 4 × 5	208.0	0.000*	187.2	0.000*
2 × 3 × 4	41.3	0.000*	40.5	0.000*
2 × 3 × 5	122.2	0.000*	117.1	0.000*
2 × 4 × 5	61.5	0.000*	48.5	0.000*
3 × 4 × 5	122.0	0.000*	120.3	0.000*
1 × 2	17.2	0.001*	/	/
1 × 5	182.4	0.000*	173.0	0.000*
2 × 5	65.9	0.000*	48.7	0.000*
3 × 4	35.9	0.000*	40.4	0.000*
3 × 5	111.7	0.000*	113.8	0.000*
4 × 5	23.6	0.000*	13.9	0.003*
1 × 3	7.5	0.058	/	/
2 × 4	10.6	0.014	11.2	0.011



表7 独立群の行の多重比較（尊敬語）

対応群	解答種	1×2	1×5	2×5	3×4	3×5	4×5	1×3	2×4
人間関係	正答	14.1, 0.000*	178.5, 0.000*	49.5, 0.000*	32.1, 0.000*	105.9, 0.000*	14.5, 0.000*	/	/
	誤答	4.1, 0.128	8.1, 0.017	12.6, 0.002	4.6, 0.098	7.7, 0.021	8.6, 0.013	/	/
	訂誤	/	/	8.0, 0.005*	/	/	/	/	/
	丸誤	/	/	11.7, 0.001*	/	/	/	/	/
	空誤	/	/	2.6, 0.125	/	/	/	/	/
文法	正答	/	166.7, 0.000*	37.7, 0.000*	37.2, 0.000*	102.2, 0.000*	10.1, 0.001*	/	/
	誤答	/	8.3, 0.016	8.4, 0.015	3.5, 0.169	12.1, 0.002*	3.5, 0.171	/	/
	訂誤	/	/	/	/	0.0, 0.971	/	/	/
	丸誤	/	/	/	/	4.9, 0.026	/	/	/
	空誤	/	/	/	/	11.7, 0.001*	/	/	/

4.1.2. 謙讓語

表8に文法性判断テストの謙讓語問題におけるクロス表を示す。セルの数字は文法性判断テストを解答した際の頻度を示す。どれも5%水準で比率の差が確認された。以下、多重比較は4.1.1節で説明した手順で行った（表9、10参照）。

表8 謙讓語の誤用訂正におけるクロス表

対応群	解答種	中国下位	中国上位	韓国下位	韓国上位	日本	合計B	$\chi^2(12)$ , p値
人間関係の 誤用問題	訂正正答	201	82	124	196	373	976	224.6, 0.000*
	訂正誤答	79	44	52	30	24	229	
	丸誤答	128	19	100	40	55	342	
	空欄誤答	32	7	20	6	4	69	
	合計A	440	152	296	272	456	1616	
関係者不在 問題	訂正正答	210	87	160	149	439	1045	311.7, 0.000*
	訂正誤答	45	21	35	14	13	128	
	丸誤答	178	43	101	107	4	433	
	空欄誤答	7	1	0	2	0	10	
	合計A	440	152	296	272	456	1616	
文法的 誤用問題	訂正正答	162	99	136	191	399	987	307.6, 0.000*
	訂正誤答	80	22	32	13	27	174	
	丸誤答	180	27	109	61	21	398	
	空欄誤答	18	4	19	7	9	57	
	合計A	440	152	296	272	456	1616	

表9 独立群の列の多重比較（謙讓語）

独立群の 組み合わせ	人間関係		関係者不在		文法	
	カイ二乗	p 値	カイ二乗	p 値	カイ二乗	p 値
1 × 2 × 3 × 4	90.3	0.000*	23.7	0.005*	105.9	0.000*
1 × 2 × 3 × 5	200.0	0.000*	295.4	0.000*	287.7	0.000*
1 × 2 × 4 × 5	177.4	0.000*	297.5	0.000*	274.4	0.000*
1 × 3 × 4 × 5	192.5	0.000*	304.8	0.000*	299.5	0.000*
2 × 3 × 4 × 5	180.6	0.000*	259.0	0.000*	176.9	0.000*
1 × 2 × 3	29.2	0.000*	14.2	0.028	47.7	0.000*
1 × 2 × 4	70.5	0.000*	17.6	0.007*	94.9	0.000*
1 × 2 × 5	163.1	0.000*	279.5	0.000*	259.9	0.000*
1 × 3 × 4	65.6	0.000*	16.7	0.010*	86.4	0.000*
1 × 3 × 5	169.7	0.000*	290.2	0.000*	278.5	0.000*
1 × 4 × 5	143.0	0.000*	286.8	0.000*	269.6	0.000*
2 × 3 × 4	78.9	0.000*	15.6	0.016	49.7	0.000*
2 × 3 × 5	169.0	0.000*	220.6	0.000*	173.6	0.000*
2 × 4 × 5	78.9	0.000*	232.0	0.000*	73.6	0.000*
3 × 4 × 5	139.7	0.000*	248.6	0.000*	166.4	0.000*
1 × 2	21.9	0.000*	/	/	39.4	0.000*
1 × 5	131.6	0.000*	271.6	0.000*	254.9	0.000*
2 × 5	77.8	0.000*	158.4	0.000*	42.5	0.000*
3 × 4	54.4	0.000*	/	/	35.4	0.000*
3 × 5	130.7	0.000*	204.9	0.000*	166.3	0.000*
4 × 5	12.8	0.005*	207.4	0.000*	55.0	0.000*
1 × 3	1.9	0.590	/	/	12.6	0.006*
2 × 4	25.0	0.000*	/	/	12.5	0.006*

表10 独立群の行の多重比較（謙譲語）

対応群	解答種	1 × 2	1 × 5	2 × 5	3 × 4	3 × 5	4 × 5	1 × 3	2 × 4
人間関係	正答	3.1, 0.079	126.9, 0.000*	47.0, 0.000*	52.4, 0.000*	127.5, 0.000*	9.5, 0.002*	/	14.2, 0.000*
	誤答	20.5, 0.000*	6.1, 0.047	23.3, 0.000*	2.3, 0.310	3.4, 0.183	3.1, 0.209	/	10.0, 0.007*
	訂誤	20.1, 0.000*	/	17.7, 0.000*	/	/	/	/	8.0, 0.005*
	丸誤	15.1, 0.000*	/	23.3, 0.000*	/	/	/	/	9.8, 0.002*
	空誤	0.6, 0.453	/	1.5, 0.216	/	/	/	/	0.2, 0.655
関係者不在	正答	/	264.3, 0.000*	148.9, 0.000*	/	197.4, 0.000*	188.8, 0.000*	/	/
	誤答	/	28.6, 0.000*	10.9, 0.004*	/	18.1, 0.000*	40.7, 0.000*	/	/
	訂誤	/	28.5, 0.000*	10.8, 0.001*	/	18.1, 0.000*	40.6, 0.000*	/	/
	丸誤	/	23.7, 0.000*	10.0, 0.002*	/	18.1, 0.000*	36.6, 0.000*	/	/
	空誤	/	0.5, 0.466	0.3, 0.607	/	/	0.3, 0.596	/	/
文法	正答	36.7, 0.000*	245.7, 0.000*	38.5, 0.000*	34.2, 0.000*	151.0, 0.000*	33.1, 0.000*	6.1, 0.013	1.2, 0.280
	誤答	3.8, 0.151	16.4, 0.000*	3.0, 0.219	1.4, 0.506	18.9, 0.000*	21.1, 0.000*	6.7, 0.034	10.9, 0.004*
	訂誤	/	7.5, 0.006*	/	/	15.9, 0.000*	15.9, 0.000*	/	10.8, 0.001*
	丸誤	/	15.3, 0.000*	/	/	17.1, 0.000*	20.5, 0.000*	/	8.4, 0.004*
	空誤	/	5.5, 0.019	/	/	0.6, 0.449	1.7, 0.197	/	0.1, 0.821*

#### 4.1.3. 丁寧語

表11に文法性判断テストの丁寧語問題におけるクロス表を示す。セルの数字は文法性判断テストを解答した際の頻度を示す。どの独立群の間でも、5%水準で有意であった。以下、多重比較は4.1.1節で説明した手順で行った（表12, 13参照）。

表11 丁重語の誤用訂正におけるクロス表

対応群	解答種	中国下位	中国上位	韓国下位	韓国上位	日本	合計B	$\chi^2(12)$ , p 値
人間関係の 誤用問題	訂正正答	237	126	194	239	348	1144	143.3, 0.000*
	訂正誤答	113	12	54	21	46	246	
	丸誤答	74	14	36	10	61	195	
	空欄誤答	16	0	12	2	1	31	
	合計A	440	152	296	272	456	1616	
文法的 誤用問題	訂正正答	163	109	127	179	415	993	362.1, 0.000*
	訂正誤答	84	17	29	11	14	155	
	丸誤答	176	24	127	80	25	432	
	空欄誤答	17	2	13	2	2	36	
	合計A	440	152	296	272	456	1616	

表12 独立群の列の多重比較（丁重語）

独立群の 組み合わせ	人間関係		文法	
	カイ二乗	p 値	カイ二乗	p 値
1 × 2 × 3 × 4	111.8	0.000*	115.5	0.000*
1 × 2 × 3 × 5	90.0	0.000*	342.7	0.000*
1 × 2 × 4 × 5	138.8	0.000*	312.9	0.000*
1 × 3 × 4 × 5	125.1	0.000*	347.7	0.000*
2 × 3 × 4 × 5	69.2	0.000*	227.6	0.000*
1 × 2 × 3	45.9	0.000*	67.8	0.000*
1 × 2 × 4	110.4	0.000*	99.1	0.000*
1 × 2 × 5	87.7	0.000*	293.4	0.000*
1 × 3 × 4	89.2	0.000*	78.9	0.000*
1 × 3 × 5	65.9	0.000*	326.9	0.000*
1 × 4 × 5	121.8	0.000*	304.8	0.000*
2 × 3 × 4	49.8	0.000*	61.0	0.000*
2 × 3 × 5	40.0	0.000*	221.2	0.000*
2 × 4 × 5	22.8	0.001*	99.3	0.000*
3 × 4 × 5	60.5	0.000*	213.8	0.000*
1 × 2	42.4	0.000*	55.6	0.000*
1 × 5	63.5	0.000*	285.0	0.000*
2 × 5	3.1	0.370	36.0	0.000*
3 × 4	40.1	0.000*	34.7	0.000*
3 × 5	27.3	0.000*	210.3	0.000*
5 × 5	21.4	0.000*	81.6	0.000*
1 × 3	11.1	0.011	12.0	0.007*
2 × 4	6.7	0.083	15.8	0.001*

表13 独立群の行の多重比較（丁重語）

対応群	解答種	1 × 2	1 × 5	2 × 5	3 × 4	3 × 5	4 × 5	1 × 3	2 × 4
人間関係	正答	40.1, 0.000*	49.8, 0.000*	/	39.0, 0.000*	10.4, 0.001*	14.6, 0.000*	/	/
	誤答	4.2, 0.120	15.1, 0.001*	/	1.5, 0.478	16.2, 0.000*	8.9, 0.012	/	/
	訂誤	/	4.8, 0.028	/	/	2.3, 0.133	/	/	/
	丸誤	/	11.5, 0.001*	/	/	9.5, 0.002*	/	/	/
	空誤	/	6.6, 0.0102	/	/	10.6, 0.001*	/	/	/
文法	正答	54.7, 0.000*	284.8, 0.000*	35.7, 0.000*	29.9, 0.000*	206.4, 0.000*	72.0, 0.000*	2.5, 0.111	1.6, 0.212
	誤答	1.5, 0.474	0.3, 0.860	0.3, 0.877	5.2, 0.073	5.9, 0.052	10.6, 0.005*	9.6, 0.008*	15.1, 0.001*
	訂誤	/	/	/	/	/	9.3, 0.002*	9.6, 0.002*	13.8, 0.000*
	丸誤	/	/	/	/	/	10.5, 0.001*	6.5, 0.011	14.9, 0.000*
	空誤	/	/	/	/	/	0.7, 0.392	0.4, 0.525	0.6, 0.422

#### 4.1.4. 検定結果のまとめ

ここでは、4.1.1節から4.1.3節までの結果（表7，10，13）と観測値（19ページの表14）<sup>12</sup>を基に関係式を立式し、式展開を行う。表14の観測値は、表5，8，11を基に算出された割合である。例えば、尊敬語・人間関係・中国下位の場合、表5から  $A = 233 \div 440 = 0.530$ ， $B = 99 \div (99 + 90 + 18) = 0.478$ ， $C = 90 \div (99 + 90 + 18) = 0.435$ ， $D = 18 \div (99 + 90 + 18) = 0.087$ と算出されている。係数の下付きの記号のうち、アルファベットは対応群（n：人間関係の誤用問題，k：関係者不在問題，b：文法的誤用問題），数字は独立群（1：中国下位，2：中国上位，3：韓国下位，4：韓国上位，5：日本語母語話者）を意味する。

##### (1) 尊敬語の場合

例えば、人間関係の誤用問題における中国下位－中国上位－日本語母語話者の比較をする場合、表7の人間関係の誤用問題の「1 × 2」，「1 × 5」，「2 × 5」に着目する。正答の行ではどれも有意差が出ていることから、 $A (= j)$ について相互に差があることが分かる。次に表14のAの観測値を見ると、中国下位は0.530，中国上位は0.704，日本語母語話者は0.925になっているのが分かる。以上のことから、「 $j_{1n} < j_{2n} < j_{5n}$ 」という関係式が成り立つ。以下、尊敬語の正答に関する関係式を示す。

$$j_{1n} < j_{2n} < j_{5n}, j_{1b} = j_{2b} < j_{5b}, j_{3n} < j_{4n} < j_{5n}, j_{3b} < j_{4b} < j_{5b},$$

$$j_{1n} = j_{3n}, j_{1b} = j_{3b}, j_{2n} = j_{4n}, j_{2b} = j_{4b}$$

次に訂正誤答 B (= ew) について説明する。例えば、これも表 7 の人間関係の誤用問題の「1 × 2」, 「1 × 5」, 「2 × 5」に注目する。訂正誤答の行では「2 × 5」だけが有意差が見られた。表 14 を見ると中国下位は 0.478, 中国上位は 0.644, 日本語母語話者は 0.324 になっていることから、「 $e_{5n}W_{5n} \leq e_{1n}W_{1n} \leq e_{2n}W_{2n}$ 」という関係式が成り立つ。以下、尊敬語の訂正誤答に関する関係式を示す。

$$\begin{aligned} e_{5n}W_{5n} &\leq e_{1n}W_{1n} \leq e_{2n}W_{2n}, & e_{1b}W_{1b} &= e_{2b}W_{2b} = e_{5b}W_{5b}, & e_{3n}W_{3n} &= e_{4n}W_{4n} = e_{5n}W_{5n}, \\ e_{3b}W_{3b} &= e_{4b}W_{4b} = e_{5b}W_{5b}, & e_{1n}W_{1n} &= e_{3n}W_{3n}, & e_{1b}W_{1b} &= e_{3b}W_{3b}, & e_{2n}W_{2n} &= e_{4n}W_{4n}, \\ e_{2b}W_{2b} &= e_{4b}W_{4b} \end{aligned}$$

次に空欄誤答 D (= (1 - e)(1 - g)) について説明する。丸誤答 C (= e(1 - w) + (1 - e)g) の関係式を省いたのは、B + C + D = 1 が成立するため、そのうちの 2 係数だけ分かれば残り 1 つも分かり、3 係数の中で C の式が最も複雑であるからである。ここでは便宜上 B と D だけの関係式だけを算出することにした。これも、表 7 の人間関係の誤用問題における空欄誤答の「1 × 2」, 「1 × 5」, 「2 × 5」に注目する。有意差がどれも無いことから、関係式が「(1 - e<sub>1n</sub>)(1 - g<sub>1</sub>) = (1 - e<sub>2n</sub>)(1 - g<sub>2</sub>) = (1 - e<sub>5n</sub>)(1 - g<sub>5</sub>)」と導ける。以下、尊敬語の空欄誤答に関する関係式を示す。

$$\begin{aligned} (1 - e_{1n})(1 - g_1) &= (1 - e_{2n})(1 - g_2) = (1 - e_{5n})(1 - g_5) \\ (1 - e_{1n})(1 - g_1) &= (1 - e_{2n})(1 - g_2) = (1 - e_{5n})(1 - g_5), \\ (1 - e_{1b})(1 - g_1) &= (1 - e_{2b})(1 - g_2) = (1 - e_{5b})(1 - g_5), \\ (1 - e_{3n})(1 - g_3) &= (1 - e_{4n})(1 - g_4) = (1 - e_{5n})(1 - g_5), \\ (1 - e_{3b})(1 - g_3) &\geq (1 - e_{4b})(1 - g_4) \geq (1 - e_{5b})(1 - g_5), \\ (1 - e_{1n})(1 - g_1) &= (1 - e_{3n})(1 - g_3), \\ (1 - e_{1b})(1 - g_1) &= (1 - e_{3b})(1 - g_3), \\ (1 - e_{2n})(1 - g_2) &= (1 - e_{4n})(1 - g_4), \\ (1 - e_{2b})(1 - g_2) &= (1 - e_{4b})(1 - g_4) \end{aligned}$$

## (2) 謙譲語の場合

謙譲語も (1) 尊敬語の場合と同様に、表 10 と表 14 を参考に関係式を導いていく。以下に謙譲語における関係式を示す。

$$\begin{aligned} j_{1n} &= j_{2n} < j_{5n}, & j_{1k} &= j_{2k} < j_{5k}, & j_{1b} &< j_{2b} < j_{5b}, & j_{3n} &< j_{4n} < j_{5n}, & j_{3k} &= j_{4k} < j_{5k}, & j_{3b} &< j_{4b} < j_{5b}, \\ j_{1n} &= j_{3n}, & j_{1k} &= j_{3k}, & j_{1b} &= j_{3b}, & j_{2n} &< j_{4n}, & j_{2k} &= j_{4k}, & j_{2b} &= j_{4b}, \\ e_{1n}W_{1n} &= e_{5n}W_{5n} < e_{2n}W_{2n}, & e_{1k}W_{1k} &= e_{2k}W_{2k} < e_{5k}W_{5k}, & e_{1b}W_{1b} &\leq e_{2b}W_{2b} \leq e_{5b}W_{5b}, \\ e_{3n}W_{3n} &= e_{4n}W_{4n} = e_{5n}W_{5n}, & e_{3k}W_{3k} &= e_{4k}W_{4k} < e_{5k}W_{5k}, & e_{3b}W_{3b} &= e_{4b}W_{4b} < e_{5b}W_{5b}, \\ e_{1n}W_{1n} &= e_{3n}W_{3n}, & e_{1k}W_{1k} &= e_{3k}W_{3k}, & e_{1b}W_{1b} &= e_{3b}W_{3b}, & e_{2n}W_{2n} &> e_{4n}W_{4n}, \\ e_{2k}W_{2k} &= e_{4k}W_{4k}, & e_{2b}W_{2b} &> e_{4b}W_{4b} \\ (1 - e_{1n})(1 - g_1) &= (1 - e_{2n})(1 - g_2) = (1 - e_{5n})(1 - g_5), \\ (1 - e_{1k})(1 - g_1) &= (1 - e_{2k})(1 - g_2) = (1 - e_{5k})(1 - g_5), \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
(1 - e_{1b})(1 - g_1) &= (1 - e_{2b})(1 - g_2) = (1 - e_{5b})(1 - g_5), \\
(1 - e_{3n})(1 - g_3) &= (1 - e_{4n})(1 - g_4) = (1 - e_{5n})(1 - g_5), \\
(1 - e_{3k})(1 - g_3) &= (1 - e_{4k})(1 - g_4) = (1 - e_{5k})(1 - g_5), \\
(1 - e_{3b})(1 - g_3) &= (1 - e_{4b})(1 - g_4) = (1 - e_{5b})(1 - g_5), \\
(1 - e_{1n})(1 - g_1) &= (1 - e_{3n})(1 - g_3), (1 - e_{1k})(1 - g_1) = (1 - e_{3k})(1 - g_3), \\
(1 - e_{1b})(1 - g_1) &= (1 - e_{3b})(1 - g_3), (1 - e_{2n})(1 - g_2) = (1 - e_{4n})(1 - g_4), \\
(1 - e_{2k})(1 - g_2) &= (1 - e_{4k})(1 - g_4), (1 - e_{2b})(1 - g_2) = (1 - e_{4b})(1 - g_4)
\end{aligned}$$

### (3) 丁重語の場合

丁重語も(1)尊敬語の場合と同様に、表13と表14を参考に関係式を導いていく。以下に丁重語における関係式を示す。

$$\begin{aligned}
j_{1n} < j_{2n} = j_{5n}, \quad j_{1b} < j_{2b} < j_{5b}, \quad j_{3n} < j_{5n} < j_{4n}, \quad j_{3b} < j_{4b} < j_{5b}, \\
j_{1n} = j_{3n}, \quad j_{1b} = j_{3b}, \quad j_{2n} = j_{4n}, \quad j_{2b} = j_{4b} \\
e_{1n}W_{1n} = e_{2n}W_{2n} = e_{5n}W_{5n}, \quad e_{1b}W_{1b} = e_{2b}W_{2b} = e_{5b}W_{5b}, \\
e_{3n}W_{3n} = e_{4n}W_{4n} = e_{5n}W_{5n}, \quad e_{4b}W_{4b} \leq e_{3b}W_{3b} \leq e_{5b}W_{5b}, \\
e_{1n}W_{1n} = e_{3n}W_{3n}, \quad e_{1b}W_{1b} > e_{3b}W_{3b}, \quad e_{2n}W_{2n} = e_{4n}W_{4n}, \quad e_{2b}W_{2b} > e_{4b}W_{4b} \\
(1 - e_{1n})(1 - g_1) &= (1 - e_{2n})(1 - g_2) = (1 - e_{5n})(1 - g_5), \\
(1 - e_{1b})(1 - g_1) &= (1 - e_{2b})(1 - g_2) = (1 - e_{5b})(1 - g_5), \\
(1 - e_{3n})(1 - g_3) &\geq (1 - e_{4n})(1 - g_4) \geq (1 - e_{5n})(1 - g_5), \\
(1 - e_{3b})(1 - g_3) &= (1 - e_{4b})(1 - g_4) = (1 - e_{5b})(1 - g_5), \\
(1 - e_{1n})(1 - g_1) &= (1 - e_{3n})(1 - g_3), (1 - e_{1b})(1 - g_1) = (1 - e_{3b})(1 - g_3), \\
(1 - e_{2n})(1 - g_2) &= (1 - e_{4n})(1 - g_4), (1 - e_{2b})(1 - g_2) = (1 - e_{4b})(1 - g_4)
\end{aligned}$$

表14 解答種の観測値

敬語	対応群	独立群	A	B	C	D
尊敬語	人間関係	中国下位	0.530	0.478	0.435	0.087
		中国上位	0.704	0.644	0.289	0.067
		韓国下位	0.622	0.429	0.446	0.125
		韓国上位	0.835	0.600	0.356	0.044
		日本語話者	0.925	0.324	0.677	0.000
	文法	中国下位	0.364	0.189	0.711	0.100
		中国上位	0.533	0.183	0.704	0.113
		韓国下位	0.429	0.189	0.675	0.136
		韓国上位	0.684	0.209	0.733	0.058
		日本語話者	0.790	0.188	0.802	0.010
謙譲語	人間関係	中国下位	0.457	0.331	0.536	0.134
		中国上位	0.540	0.629	0.271	0.100
		韓国下位	0.419	0.302	0.581	0.116
		韓国上位	0.721	0.395	0.526	0.079
		日本語話者	0.818	0.289	0.663	0.048
	関係者不在	中国下位	0.477	0.196	0.774	0.030
		中国上位	0.572	0.323	0.662	0.015
		韓国下位	0.541	0.257	0.743	0.000
		韓国上位	0.548	0.114	0.870	0.016
		日本語話者	0.963	0.765	0.235	0.000
	文法	中国下位	0.368	0.288	0.648	0.065
		中国上位	0.651	0.415	0.509	0.076
		韓国下位	0.460	0.200	0.681	0.119
		韓国上位	0.702	0.161	0.753	0.086
		日本語話者	0.875	0.474	0.368	0.158
				中国下位	0.539	0.557
丁寧語	人間関係	中国上位	0.829	0.462	0.539	0.000
		韓国下位	0.655	0.529	0.353	0.118
		韓国上位	0.879	0.636	0.303	0.061
		日本語話者	0.763	0.426	0.565	0.010
	文法	中国下位	0.371	0.303	0.635	0.061
		中国上位	0.717	0.395	0.558	0.047
		韓国下位	0.429	0.172	0.752	0.077
		韓国上位	0.658	0.118	0.860	0.022
		日本語話者	0.910	0.342	0.610	0.049

#### 4.2. 確率モデルの係数算出

4.1節では検定の結果を確率モデルに適用することで得られた関係式を整理したが、それらを制約条件<sup>13</sup>として、今度は最小二乗法を用いて係数の近似値を算出した。その計算結果を次ページの表15にまとめた。

表3でも説明したように、Aは中間言語を反映した正答（正用的中間言語、日本語母語話者なら正用的敬語習得量）、Eは中間言語を反映した誤答（誤用的中間言語、日本語母語話者なら誤用的敬語習得量）の割合、Fは中間言語の割合（量的中間言語、日本語母語話者なら敬語習得量）であり、A、E、Fの算出が本稿の目的の1つでもある。図2～図8にA、E、Fについてのグラフを示した。



表 15 最小二乗法により算出した係数

敬語	対応群	独立群	j (=A)	e	w	g	E	F	誤差
尊敬語	人間関係	中国下位	0.559	0.817	0.577	0.495	0.360	0.919	1521
		中国上位	0.801	0.812	0.581	0.509	0.162	0.963	
		韓国下位	0.559	0.816	0.578	0.498	0.360	0.919	
		韓国上位	0.801	0.815	0.579	0.500	0.162	0.963	
		日本語話者	0.924	0.841	0.561	0.417	0.064	0.988	
	文法	中国下位	0.453	0.807	0.237	0.499	0.441	0.895	8836
		中国上位	0.453	0.807	0.237	0.501	0.441	0.894	
		韓国下位	0.453	0.807	0.238	0.501	0.441	0.894	
		韓国上位	0.453	0.806	0.238	0.502	0.441	0.894	
		日本語話者	0.782	0.326	0.587	0.857	0.071	0.853	
謙讓語	人間関係	中国下位	0.453	0.765	0.422	0.497	0.418	0.872	640
		中国上位	0.453	0.766	0.772	0.494	0.419	0.872	
		韓国下位	0.453	0.765	0.422	0.497	0.418	0.871	
		韓国上位	0.721	0.769	0.420	0.488	0.215	0.935	
		日本語話者	0.813	0.818	0.394	0.349	0.153	0.966	
	関係者不在	中国下位	0.512	0.943	0.214	0.649	0.460	0.972	1226
		中国上位	0.512	0.960	0.211	0.501	0.469	0.980	
		韓国下位	0.512	0.959	0.211	0.508	0.468	0.980	
		韓国上位	0.512	0.959	0.211	0.506	0.469	0.980	
		日本語話者	0.961	0.980	0.638	0.000	0.038	0.999	
	文法	中国下位	0.397	0.835	0.307	0.500	0.503	0.901	1157
		中国上位	0.685	0.854	0.477	0.435	0.269	0.954	
		韓国下位	0.397	0.835	0.307	0.501	0.503	0.901	
		韓国上位	0.685	0.838	0.306	0.492	0.264	0.949	
		日本語話者	0.878	0.795	0.645	0.600	0.097	0.975	
丁寧語	人間関係	中国下位	0.576	0.857	0.621	0.498	0.363	0.939	3009
		中国上位	0.795	0.858	0.621	0.495	0.176	0.971	
		韓国下位	0.576	0.856	0.621	0.499	0.363	0.939	
		韓国上位	0.795	0.856	0.621	0.499	0.176	0.971	
		日本語話者	0.795	0.867	0.614	0.461	0.178	0.973	
	文法	中国下位	0.389	0.860	0.351	0.556	0.525	0.915	505
		中国上位	0.671	0.876	0.345	0.500	0.288	0.959	
		韓国下位	0.389	0.876	0.226	0.498	0.535	0.924	
		韓国上位	0.671	0.858	0.099	0.563	0.282	0.953	
		日本語話者	0.910	0.488	0.619	0.879	0.044	0.954	

図 2～図 8 の白い部分が正用的中間言語，黒い部分が誤用的中間言語，両者を合わせた棒全体が量的中間言語の総体である。各々の敬語種および誤用問題において，量的中間言語を構成する正用的中間言語および誤用的中間言語は，敬語種，日本語運用能力，母語によって傾向が異なる。

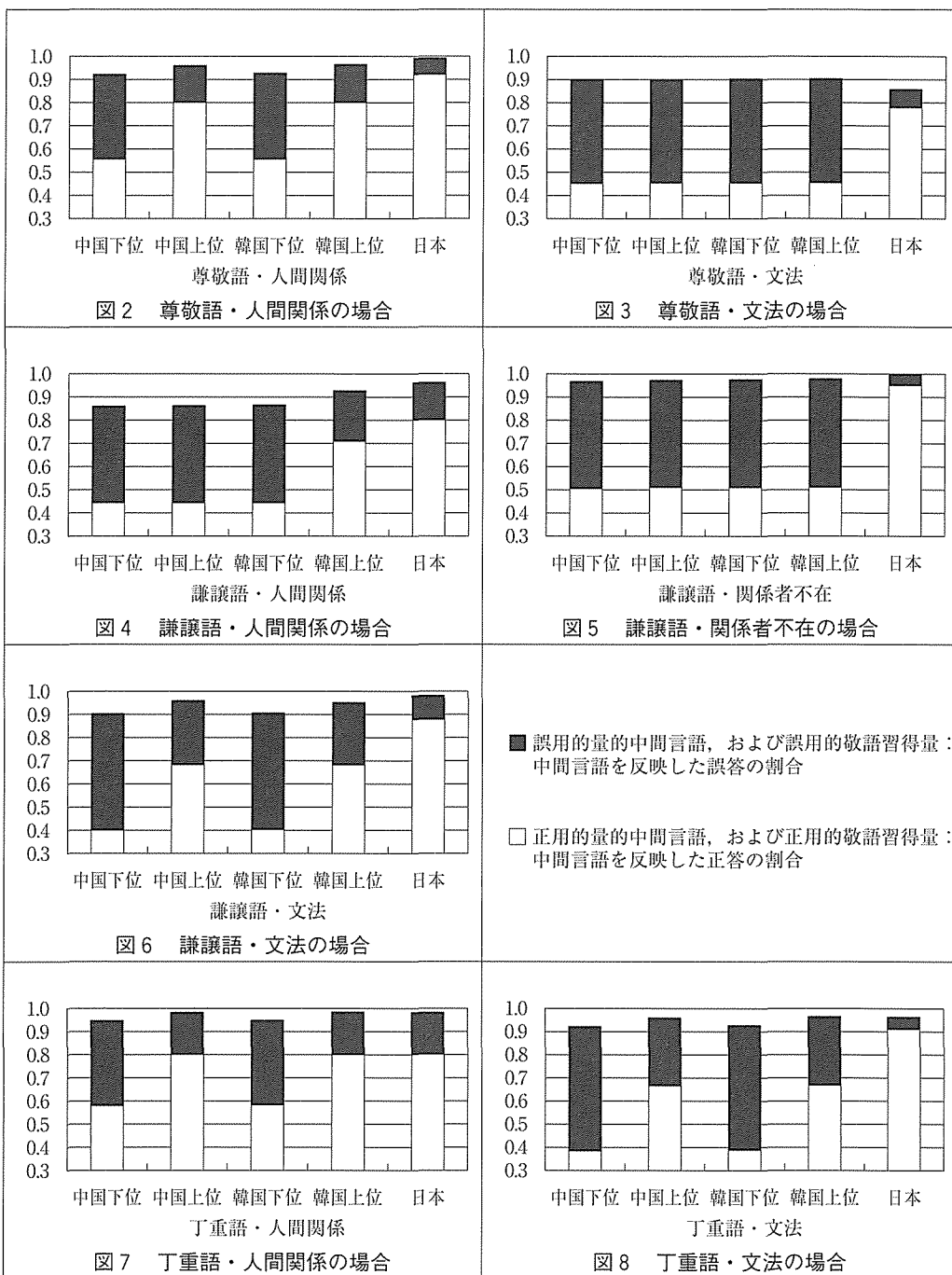


図2～8 日本語学習者の量的中間言語および日本語母語話者の敬語習得量

尊敬語について見ると、人間関係の誤用問題は、日本語運用能力が高いと正用的中間言語が発達し、誤用的中間言語が衰退するが、文法的誤用問題は、日本語母語話者を除いて、どの属性の場合も変化がほとんどなく、誤用的中間言語が高い割合で停滞しているのが分かる。また母語の違いによる量的中間言語の差異については、人間関係と文法共に、下位群も上位群も見られなかった。

謙讓語については、それぞれの誤用問題で異なった傾向を示している。図4の人間関係の誤用問題については、中国下位と上位では正用的中間言語と誤用的中間言語ともにほとんど変わらないが、韓国下位から韓国上位にかけて正用的中間言語が増加し、誤用的中間言語が減少している。そして、日本語母語話者との比較ではさらにその傾向が強まっている。そのような傾向は、図6の文法的誤用問題の中国・韓国ともに見られる。図5の関係者不在問題は、日本語母語話者を除き属性に関係なく、正用的および誤用的中間言語で一律である。

丁重語について見ると、図7の人間関係の誤用問題は、日本語運用能力が下位群から上位群になるときに正用的中間言語が発達し、誤用的中間言語が衰退するが、上位群と日本語母語話者の間には正用的および誤用的中間言語の差がほとんどなく、横這いとなっているのが分かる。一方、図8の文法的誤用問題は、日本語運用能力が下位群から上位群にかけて正用的中間言語が劇的に発達し、誤用的中間言語が劇的に衰退し、上位群と日本語母語話者との比較でも、正用的中間言語の発達と誤用的中間言語の衰退が見られた。また、母語の違いによる正用的および誤用的中間言語の差異については、どちらの誤用問題でもほとんど差が見られなかった。

## 5. 考察

本稿では中国人・韓国人日本語学習者および日本語母語話者を対象に、それぞれの敬語種、誤用問題、属性について中間言語を定量化し、その結果を報告した。概して、日本語学習者は日本語運用能力が下位から上位、また上位から日本語母語話者に近づくにつれ、量的中間言語が発達することが確認された。しかしながら、それを構成する正用的および誤用的中間言語は、言語運用能力間および属性間でそれぞれ異なった傾向を示している。

### 5.1. 日本語運用能力の差異と量的中間言語との関係

まず、独立群（日本語運用能力の違い）と量的中間言語との関係について考察していく。尊敬語の人間関係の誤用問題と謙讓語の文法的誤用問題と丁重語全般において、言語運用能力が日本語話者に近づくにつれて、正用的中間言語が発達し、誤用的中間言語が衰退するというある種理想的な習得プロセスを経ている。一方、尊敬語の文法的誤用問題と謙讓語の関係者不在問題においては、日本語母語話者を除いて、正用的および誤用的中間言語にほとんど差が見られず、謙讓語の人間関係の誤用問題では中国人学習者の下位・上位間に差が見られなかった。

宮田(2004a)は、謙讓語は尊敬語と丁重語と比べ規則が多く、また複雑であるため、習得に向けて過剰般化と簡略化がより活発になり、その結果が規則的な誤用を多く生み出すことに繋がるという仮説を提示している。しかし、本稿の結果からは、規則が多く複雑である謙讓語におい

て、むしろ正用的中間言語の発達が妨げられるものと考えられる。正用的中間言語の発達が阻害されている現象は、文法的誤用訂正能力よりもむしろ社会言語的誤用訂正能力（特に関係者不在問題全般と人間関係の誤用問題の中国人学習者）に見られ、中間言語が安定してくる上位においても依然として誤用的中間言語が大きいままで、化石化の可能性がある。

尊敬語の文法的誤用問題の正用的中間言語に関しては、検定で有意差が確認されている点では、他の敬語種と同じく言語運用能力との相関はある。しかし、最小二乗法により日本語母語話者以外はほとんど差が見られないことと、正用的および誤用的中間言語に関しても、上・下位群の間、母語間でほとんど差が見られないことから、文法的誤用訂正能力の言語運用能力との相関は社会言語的誤用訂正能力1ほどではないといえる。また、尊敬語の文法的誤用問題の最小二乗法の誤差が、制約条件の関係上、他の敬語種と比べて大きくならざるを得なかったことから、言語運用能力との相関が明確にならなかったと考えられる。

## 5.2. 母語の差異と量的中間言語との関係

次に独立群（母語の違い）と量的中間言語との関係について考察する。母語間の比較において、概して中韓の差はどの敬語種・誤用問題でも正用的および誤用的中間言語ではほとんどなく、一部であるが、謙讓語の人間関係の誤用問題で、韓国上位は中国上位よりも正用的中間言語が高く、誤用的中間言語が低いことが分かった。

佐治(1983)と興水(1977)によると、現代中国語における敬語は敬称（例：先生、同志、您など）にのみ使われ、動詞レベルには存在していないことから、韓国人学習者と比べ中国人学習者の母語転移の影響はそれほど強くないと考えられる。また、負の転移は制限的で音声以外には証拠がないという Corder(1993)の主張からも、社会言語レベルおよび文法レベルでの負の転移は起こりにくいと考えられる。そのため、中韓上位間の謙讓語の人間関係の誤用問題において、中国人学習者が韓国人学習者よりも誤用的中間言語が発達しているというのは、中国人学習者が負の転移を起こしているのではなく、むしろ韓国人学習者が負の転移を抑制しているか、または正の転移を行っているか、またはその両方であると考えられる。

また、第二言語のある体系的特性が母語に調和し、かつ中間言語がある段階まで発達すると転移が起こるという Zobl(1980)の主張にもあるように、韓国上位が韓国下位よりも転移を起こしやすい属性である可能性がある。また全体的に量的中間言語の母語間の差が微弱である理由として、先に挙げた日本語運用能力が量的中間言語に与える影響が母語の量的中間言語に与える影響よりも強いいため、相対的に差が見られにくくなっているといえる。またもう1つの理由として、検定の時点で有意差が見られないことから、中国人学習者にとって謙讓語に比べ尊敬語の規則性を習得することがそれほど困難ではないことが考えられる。一方で、Faerch & Kasper(1987)が主張するように、転移の仮説は言語的要因に限ったことではなく、心理言語的・社会心理的転移<sup>14</sup>も考えられたが、本稿ではどの敬語種・誤用問題でも心理言語的転移の可能性が低いと考えられる。尊敬語と謙讓語において言語的に転移できる材料は基本的に韓国人学習者ならいつでも保持している。しかし中韓の間で、尊敬語と謙讓語の関係者不在問題および文法的誤用問題では量的

中間言語に差が見られないのに対し、謙譲語の人間関係の誤用問題では中韓上位間のみ正用的および誤用的中間言語で両者とも差異が見られることから、心理言語的距離はあまり影響がないものと考えられる。韓国人学習者は敬語種の違いには気が付いている（対応群の違いにも気が付いている可能性もある）ために、その都度韓国語と日本語との親近感を変え、転移をするか否かを決定している可能性があるものの、量的中間言語については正用的・誤用的中間言語の違いに気付いて区別しているわけではなく、出した回答が一様に正用だと判断している。その過程で、韓国上位だけが謙譲語の人間関係の誤用問題のみ心的距離を縮めて転移を行っているというには、証拠が不十分である。

また、金田一・林・柴田編(1988:653)によると、韓国語の敬語動詞には尊敬語と謙譲語が挙げられ、丁寧語については言及されていない。そのため、丁寧語の量的中間言語に母語間の差異が見られなかったといえる。

## 6. 日本語教育への提言

本稿では中国人・韓国人日本語学習者および日本語母語話者を対象に、中間言語を定量化し、結果および考察を述べてきた。中間言語の発達状況を知ることは、第二言語習得研究の1つの目標である。本稿は、言語運用だけでは分からない学習者の言語能力について、誤用訂正能力を通じて中間言語の定量化を試み、把握が困難であった中間言語をある意味、顕在化させたともいえる。日本語教育の立場から言えば、中間言語の発達状況に応じて、教授法や教材作成を改良することに対して、本稿は1つの示唆を与えることができたのではないだろうか。

謙譲語の場合、社会言語的能力において母語・日本語運用能力・誤用訂正能力の種類に関わらず、化石化の傾向があり、正用的中間言語が停滞していることから、他の2種の敬語種以上に注意を払わなければならない。いきなり第二のウチ・ソト関係といった複雑な人間関係（例えば、社長は私にとって上位者であるが、他会社の社員や顧客が聞き手になった場合の社長は上位者ではなく同等として扱う）を導入せず、まずは第一のウチ・ソト関係に限って、聞き手＝関係者、話し手＝行為者といった単純な人間関係を設定し、よく使われる敬語動詞を用いて文法と均等に指導するなど行うといいだろう。

今回の調査では、母語転移の影響が日本語運用能力に比べそれほど大きな要因ではなかったが、もし韓国人学習者だけの教室があり、日本語教師が韓国語に精通しているならば、初級から中級にかけての敬語項目が既に導入されている学習者には、間違いを恐れさせず積極的に母語転移を促す指導もしてみるのもいいだろう。その場合、社会言語的能力2の化石化も確認されたことから、地道なフィードバックを忘れないようにするべきであろう。このように、敬語種、あるいはクラスの状況によって指導する力点を効率よく変えてみる余地がある。

### 注

- 1 本稿の対象となった中国人話者は、日本語学校や大学の留学生センターや別科で既にフォーマルインストラクションを受けた中国北中部出身者のみに厳選し、香港などの広東語話者、政治

社会体制が異なる台湾出身者、吉林省出身者のハングル語話者、チベット語話者は含めていない。

- 2 初めの調査では主に中国人学習者を、後の調査では韓国人学習者および日本語母語話者のデータを収集した。2つの調査時期に大きな時間的隔たりはなく調査方法は全く同一であるため、本研究ではデータを合併することにした。
- 3 この際解答時間・手紙文の字数は問わなかったが、手紙文に関しては想像を豊かにして、可能ならば文章が1, 2文で終わらないよう指示した。手紙の題目は以下のとおりである。

「あなたは学校でA先生とよく話をするぐらい親しい関係です。あなたはある日、A先生の家へ行きました。そのとき、A先生から高価な皿を借りました。しかし、あなたはそれを割ってしまいました。あなたはA先生にすぐに会うことができません。A先生に手紙を書いてください。」

手紙文を「謝罪」を促す題目にすることで、上・超級レベルまで判定を可能にしている。上級学習者以上なら単なる謝罪で終わらず理由付けや心情などを段落レベルで叙述・描写することが期待でき、超級学習者ならさらに読み手の「A先生」への配慮（敬体・常体のシフト調整や敬語使用など）を観察することができる。また謝罪という性質上、非言語行動を重視し、言語行動に表出しにくくなるというおそれもあることから、極端な設定（「ちょっと足を踏んでしまった」とか「車で人をはねた」など）を避けた。

- 4 一般に日本語学習者のプレースメントには様々な方法（日本語能力試験の合否、学習歴・学習時間、教育機関独自の試験など）があるが、汎用性・妥当性という点で問題が指摘されている。現在ライティングの評価に最も適した方法はなく、依然として大きな問題であることに変わりはないが、ACTFLの言語運用基準を用いることでこのような問題が軽減できると思われ、プレースメントの手段として本稿に採用した。

ACTFLの提唱する言語運用基準の書く技能の汎言語的記述は、大きく初級-下/初級-中/初級-上、中級-下/中級-中/中級-上、上級/上級-上、超級の9段階からなっている。初級-下から超級まで1から9までの点数を割り振り、2人の評価者（日本語母語話者の日本語教師）により調査協力者の手紙文を評価した。2人の評価の点差が0、または1なら、2人の評価点の和を2で割る。点差が2以上なら、3人目の日本語教師により評価され、前の2人が行った評価のうち点数が近いものとの点数と平均をとり、それを評価とする。この評価法により、3以上（「初級-上」以上）7未満（「上級」未満）の範疇にある学習者を下位群日本語学習者、7以上（「上級」以上）9以下（「超級」以下）の学習者を上位群日本語学習者と見なし本稿の対象とした。

「中国下位-韓国下位」および「中国上位-韓国上位」のそれぞれのパターンについて、同じ下位群同士（または上位群同士）で作文評価に差が出ていないことが望ましい。その確認をMann-Whitney U検定で行った結果、それぞれのパターンにおいて5%水準で有意でないことが分かった（ $p=0.070, 0.089$ ）。

調査協力者のレベル分けに参加した日本語教師は3名で、3名ともACTFLガイドライン利用の訓練を受けたことはなく、ACTFL言語運用基準を参考に記述に近いものを採用するよう指示した。訓練を受けていないということで信頼性の問題が浮上したため、初めの2名の評価者について相関係数（Spearmanの $\rho$ ）を算出した。その結果、作文評価の信頼性の高さ（つまり、評価者の評価の一致率が高いこと）を確認することができた（ $r=0.713, p=0.000, N=145$ ）。

- 5 日本語母語話者は日本語学習者にとって目標言語の話者であり、比較参考するために設定した。分析の過程で最終的に算出される量的中間言語は、日本語母語話者に対しては敬語習得量と用語を改める。
- 6 採点対象外問題は、出題されている問題が正文から構成されている。逆に採点の対象となる問題は非文から構成されている。
- 7 堀川・林(1969)によると、交替形式とは「食べる」を敬語化したときに「召し上がる」といったように、語そのものを変えなければならない形式をいい、添加形式とは「話す」を敬語化したときに「お話しになる」といったように、敬語の構文「お／ご～になる」などに普通語を当てはめる形式をいう。本稿の文法性判断テストでは偏りがないように、両方の形式を含めた。
- 8 インフォーマントの目標言語である現代日本語共通語の視点から、文法的（特に活用など形態面）・語彙的あるいは社会言語学的に不適切な場合、下線の動詞と訂正した動詞の意味が大きく異なった場合、古典敬語を用いた場合（例えば、「おっしゃいます」が音便化されずに「おっしゃります」になっている場合、「なさいます」が「なされます」あるいは「なさります」になっている場合、丁寧語がマス形以外の活用がされている場合など）は誤答とした。それ以外は正答とした。
- 9 空欄誤答については読み飛ばしによるものはない。解答を随時確認して、調査協力者がどうしても答えられなかったものだけが空欄となっている。
- 10 多重比較法については永田・吉田(1997)を参考にした。特にクロス表における多重比較については、松田(2004)と松田氏本人からの意見を参考にした。本稿の多重比較のアルゴリズムについて説明をする。ある独立2群を比較する場合、クロス表は(解答種) × (独立群) = (A, B, C, D) × (α, β)となる【A:訂正正答, B:訂正誤答, C:丸誤答, D:空欄誤答, α:人間関係の誤用問題, β:文法的誤用問題】。この場合、最も検証したい仮説は以下の4つである:(A, B+C+D) × (α, β), (B, C+D) × (α, β), (C, B+D) × (α, β), (D, B+C) × (α, β)。独立2群は2列で変わらないので固定し、以下行だけで説明を進める。

これらの仮説を  $H_{A, B+C+D}$ ,  $H_{B, C+D}$ ,  $H_{C, B+D}$ ,  $H_{D, B+C}$  とすると、検証したい族  $F$  は  $F = \{H_{A, B+C+D}, H_{B, C+D}, H_{C, B+D}, H_{D, B+C}\}$  となり、どの仮説  $H$  も成立していることが  $F$  全体の帰無仮説となる。永田他(1997)によると、多重比較法において、全体で設定した有意水準（本稿では5%水準）を、もしくはこれを超えない水準を維持するよう、個々の  $H$  の有意水準を調節することが必須である。多重比較法において、一般に族に含まれる仮説が多いと、個々の仮説を検定する際の有意水準が低くなり、検出力が落ちるという難点がある。数ある多重比較法でも、本稿では検出力をなるべく維持する閉検定手順を適用する。 $L \times 2$  のクロス表に閉検定手順を応用している松田(2004)を参考に、本稿で用いるアルゴリズムを説明する。閉検定手順では閉じた族、すなわち族を構成するどの2つの仮説を取ってもその両方を満たす仮説が族内に存在する状況を想定する。 $F$  を閉じた族  $F'$  にすると、 $F' = \{H_{A, B, C, D}, H_{A, B+C+D}, H_{B, C, D}, H_{B, C+D}, H_{C, B+D}, H_{D, B+C}\}$  となる。閉じた族は階層をなす。階層に位置付けられた仮説の中でも、他の仮説を誘導する仮説から先に検定を行っていく。手順としては、まず  $H_{A, B, C, D}$  を5%水準で検定する。棄却されなければ、そこで多重比較を終了する。もし棄却されれば、次の階層にある  $H_{A, B+C+D}$ ,  $H_{B, C, D}$  をそれぞれ5%水準で検定することになる。同様に  $H_{B, C, D}$  が棄却されなければ、そこで多重比較を終了する。 $H_{B, C, D}$  は  $H_{B, C+D}$ ,  $H_{C, B+D}$ ,  $H_{D, B+C}$  の上層にある仮説であり、これらも閉じられているため、これが棄却された場合、 $H_{B, C+D}$ ,  $H_{C, B+D}$ ,  $H_{D, B+C}$  をそれぞれ5%で検定する。これら一連のアルゴリズムでは、有意水準を5%のまま

でよいことになる。

以上が、 $4 \times 2$ のクロス表における多重比較法である。次にさらに一般化した $4 \times M$ のクロス表における多重比較について説明をする。このケースに当てはまるのは、尊敬語、謙讓語、丁重語の独立群である。例えば独立群の検定を考える場合、列が $(a, \beta, \gamma, \delta, \varepsilon)$ となるため、列の多重比較を $4 \times 2$ の段階まで進めなければならない。その後は先に説明した尊敬語と丁重語の対応群における多重比較と同じ手順を踏む。この列に用いる多重比較法は永田他(1997)でも説明されている閉検定手順の1種、Tukey-Welche choiceを用いる。初めの $4 \times 5$ のクロス表では5%水準で検定を行う。もし棄却されたら、5列のうち4列を選んだ組み合わせ5組(つまり、5組の $4 \times 4$ のクロス表)に対して2.5%水準で行う。ここで2.5%としているのは、 $L \times 2$ になった後に行でもさらに検定を行うため、列に内包している仮説を最終的に2度検定することになるからである。それぞれの $4 \times 4$ のクロス表が棄却された場合、その4列のうち3列を選んだ組み合わせ( $4 \times 3$ のクロス表4組)に対して、 $1 - (1 - 0.025)^{\frac{3}{5}} = 0.015075 \dots$ つまり1.5%水準で検定を行う。最後 $4 \times 2$ のクロス表に対しては、 $1 - (1 - 0.025)^{\frac{2}{5}} = 0.010076 \dots$ つまり1%水準で検定を行う。これ以後の行の多重比較は、先の説明にもあったように、一貫して初めの有意水準を保つことができるので、 $4 \times 2$ でも有意差が確認されたものに関しては、1%水準で多重比較を進める。

- 11 Microsoft Excelのソルバーを用いて、最小二乗法を行った。尊敬語と丁重語の係数の初期設定を全て0.5とし(謙讓語は制約条件が多いことが原因で0.5では稼動しなかった。そのため、制約条件をほぼ満たすよう、ややずらして設定した)、「変化させるセル」に指定した。また、誤差を(観測値-理論値)2の総和で「目標セル」とし、それが最小になるよう目標値を「最小値」とした。近似の精度を上げるために、制約条件として検定結果を反映した関係式を含める。制限時間は100秒、反復回数は100回、精度を $10^{-6}$ 、交差を5%、収束を $10^{-4}$ とした。
- 12 群間の関係について、不等号「 $<$ 、 $>$ 」は有意差が確認されたことを、等号「 $=$ 」は有意差が確認されなかったことを、等不等号「 $\leq$ 、 $\geq$ 」は3群のうち両端にのみ有意差が確認されたことを意味する。
- 13 Microsoft Excelで用いたソルバーで付加した制約条件において、等号「 $=$ 」と等不等号「 $\leq$ 、 $\geq$ 」の条件式は入力できても、機能上、不等号「 $<$ 、 $>$ 」はできない。そのため、有意差があった場合でも、等不等号「 $\leq$ 、 $\geq$ 」を代用することにした。
- 14 心理言語的転移は、L1とTLが言語学的に類似しているか否かに関係なく、学習者がL1とTLの違いが心理的に小さいと感じることで起こる転移である。社会心理的転移とは、社会心理的要因(大人か子供か、フォーマルインストラクションを受けているか自然習得か、産出の時間的余裕があるかないか、項目的学習か体系的学習か、どのような背景で産出されたか)が影響する転移である。因みに社会心理的要因は本稿では一様に統制されているため、転移への影響は考えがたい。

#### 参考文献

- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵(1998)『敬語表現』大修館書店  
菊地康人(1997)『敬語』講談社  
金田一春彦・林大・柴田武編(1988)『日本語百科大事典』大修館書店  
熊井浩子(1992)「留学生にみられる談話行動上の問題点とその背景」『日本語学』11(13), 72-80,  
明治書院



- 興水優(1977)「中国語における敬語」『岩波講座日本語 4 敬語』273-300, 岩波書店
- 佐治圭三(1983)「中国人学習者の間違えやすい敬語表現」『日本語学』2(1), 38-49, 明治書院
- 永田靖・吉田道弘(1997)『統計的多重比較法の基礎』サイエンティスト社
- 平林周祐・浜由美子(1988)『外国人のための日本語例文シリーズ10 敬語』荒竹出版
- 堀川直義・林四郎(1969)『敬語用例中心ガイド』明治書院
- 牧野成一(1995)『ACTFL — OPI 試験官養成用マニュアル』The American Council on the Teaching of Foreign Language
- 松田眞一(2004)「名義尺度の分割表に対する多重比較法」『アカデミア 数理情報編』4, 29-37, 南山大学
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄(2002)「上級レベルの中国語系日本語学習者と韓国語系日本語学習者の敬語習得の比較」『読書科学』46(2), 63-71, 日本読書学会
- 宮岡弥生・玉岡賀津雄・林炫情(2003)「韓国語を母語とする日本語学習者の敬語使用における知識と運用」『広島経済大学研究論集』25(4), 15-30
- 宮地裕(1982)「待遇表現」『日本語教育事典』226-227, 大修館書店
- 宮田剛章(2004a)「中級中国人学習者の敬語動詞の誤用訂正能力」『都大論究』41, 24-34, 東京都立大学国語国文学会
- 宮田剛章(2004b)「中国人学習者が構築した敬語動詞の中間言語—文法性判断テストと確率モデルを用いて—」『計量国語学』24(4), 171-197, 計量国語学会
- Corder, S.P.(1993) A role for the mother tongue, In Gass, S. & L. Selinker (eds.) *Language Transfer in Language Learning*, 18-31. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Faerch, C. & G. Kasper(1987) Perspectives on language transfer, *Applied Linguistics* 8(2), 111-136.
- Zobl, H.(1980) The formal and developmental selectivity of L1 influence on L2 acquisition, *Language Learning* 30, 43-57.

#### 謝 辞

本稿を執筆するにあたり、数々の助言をくださった日本大学文理学部の荻野綱男氏と南山大学数理情報学部の松田眞一氏に御礼申し上げます。

(投稿受理日：2004年10月8日)

(最終原稿受理日：2005年5月31日)

---

宮田 剛章 (みやた たけあき)

infinitesimal@hotmail.com

# The quantitative studies in interlanguage of honorific verbs: A comparison of Chinese and Korean second language learners and Japanese native speakers

MIYATA Takeaki

## Keywords

SLA (Second Language Acquisition), honorific verbs, quantified interlanguage, probability model

## Abstract

The purpose of this study is to quantify the interlanguage of honorific verbs (*sonkeigo*, *kenjogo*, and *teichogo* verbs) possessed by Chinese and Korean learners of Japanese as a second language. It is anticipated that this study will illustrate the acquisition of honorific verbs among native speakers and non-native learners from the perspective of quantitative interlanguage.

On the whole, the learners showed an increase in quantitative interlanguage according to their Japanese proficiency. However, the development of correct and erroneous interlanguage composing quantitative interlanguage varied in attributes of the informants: the learners, in all their attributes, did not develop their correct interlanguage and lowered their erroneous interlanguage as their proficiency approached native ability. The influence of the Korean language on the construction of the Korean learners' quantitative interlanguage was found in some *kenjogo* verbs only. Initially, the occurrence of psycholinguistic and sociopsychological transfers was expected in addition to linguistic transfer, but this study did not provide crucial evidence of either regardless of the attributes.